

妻と孫を
相棒に

PART 2.



地元の狩人達の力を借りて。右が筆者と孫

「ジジ」の単独猪猟

神奈川 田宮 治

③ 猪犬の猟芸と単独猪の基本

●究極の止め芸とは

まず、愛犬の猟芸をどこで「よし」とするかは、主人の考え次第である。私の場合は、単独猟なので、犬がイノシシを止めてくれないことには、撃ち獲ることはできない。それでは、どの犬もイノシシを止めるか……という、そうではない。

和犬の中でも限られた血統の犬、つまり、限られた犬にしかできない芸である。このことは、良い親の芸は必ず子犬に伝わる……で証明される。良い親の血を引いた子犬を、飽きることなく山に引く。やがてその子犬は、姿も猟芸も親犬そっくりとなり、立派な猪犬となるのである。

楽しい猟は、愛犬の芸次第で決まるので、獵人たる者、片時も訓練を怠ってはならない。大げさに言うと、動物(犬)と思わ

ずに、わが子や妻に接するような気持ちで、毎日優しい言葉をかける。必ず自分で食事を与える。「よしよし」と褒めてやる。そして、よほどのことがないかぎりは決して怒らない。こうしたことが大事である。

犬も、主人の心をちゃんとわかっている。怒ってばかりいては、言うことは聞くだろうが、人の顔ばかり見て動き、すぐに耳を寝かせて座り込んでしまうような犬になりかねない。主人の、ちよつとした心がけの積み重ねが、やがて名犬を作るのだと思うのだが……。

愛犬が「一犬前」になったことの証明は、ケガをすることである。つまり、猪猟犬のできる目安がケガであり、やっとな訓練の成果が出てきたと、ほっとするのである。

よく「私の犬は、ケガをしない」と言う人がいるが、もちろん、中にはケガをせずにイノシシを止める技を身につけた犬もいるだろう。私が見た中でも、特に体の小さな犬で、七歳を過ぎた頃より実に巧い、「枯れた芸」とでも言おうか、イノシシとの絶妙な攻防をする猪犬がい

た。これは、見ていて飽きることはなかった。

しかし、このような犬は、ごく限られた最高の芸ができる「名犬」なのだ。そのほかの犬において、犬がケガをしないということ、イノシシもケガをしないということであり、イノシシを止めるなど考えられない。

そのような犬が仮に止めたとしても、それはイノシシのほろが勝手に止まっているだけで、主人はゆっくり忍んで近寄らなければ、飛ばれてしまう。がちりとイノシシを止め、主人に究極の刺し止めをさせる芸、これは、犬がイノシシを力でねじ伏せることであり、そこまでできる犬でなければ、単独猟においてイノシシは獲れない。

猪犬は、切られることで恐さを知り、防ぐ術を覚えていく。散々切られ、死の淵をさまよったあげく、それでもイノシシに向かつていく、これこそ本物の猪犬である。そのような芸ができる犬は、「名犬」と言うよりも「宝犬」だと、私は思っている。

●イノシシの止め猟でも安全が第一

狩猟は、「止め猟」でも「巻き狩り猟」でも安全が第一である。撃ち獲りたい気持ちを抑え、イノシシは逃がしてもよい。飛ばれようが撃ち損じようが、焦ることはない。また必ず愛犬達が止めてくれ、絶好のチャンスを与えてくれるので、そのときに撃ち獲ればよい。こんな気持ちが大切である。

やれイノシシだ、やれクマだ」と気負い、「必ず射止めるぞ」が先行すると、思わぬ物までイノシシやクマに見えたりしてしまう。気楽に構え、何が出よう、「こっちは銃持参だぞ！」くらいの余裕を持って事に当たりたいものである。絶対に焦ったり、恐がったりすることのないように注意したい。

もとより、大物猟は危険と隣り合わせである。それゆえ、まず、これらのことを念頭に置いて出猟することを勧めたい。言うまでもなく、単独猟は「夢とロマン」の大勝負なのだから。

●単独猟の注意点

単独猟は、犬とイノシシの真剣勝負である。双方、まさに生死を賭けた闘いである。酷では

あるが、負けたほうは死を、または大ケガを覚悟しなければならぬ。イノシシとの闘争において作戦を立て、犬に指令を出すのが主人である。

相手が犬とみたら、ベテラン犬だけに。これで十分止められると思つた犬群に、もう一頭加える。その一頭の力が加わることで、全犬がケガなく済むことが多い。単独猟は、当然一人で行うのだが、これに仮に猟犬を五頭かければ、実質六名のグループ猟の力となる。

私は、心の中ではたわいもないことを考え、それでも犬達の動きを見ながら山を歩く。小川のせせらぎや小鳥達、遠くの間並み、季節の風景などを楽しみながら歩いていると、歌でも歌いたたい心境にもなる。

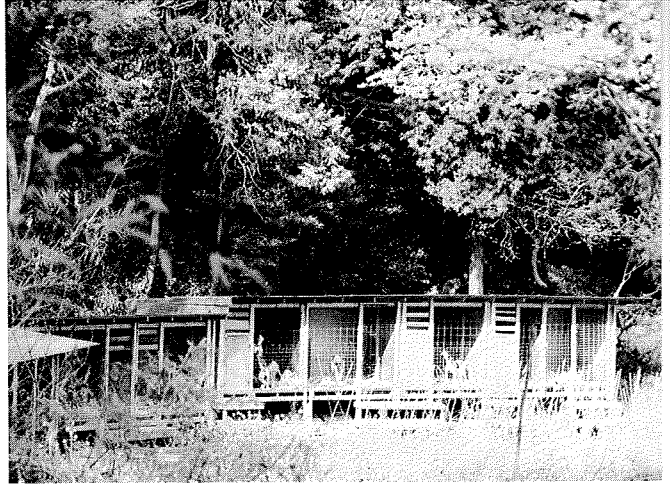
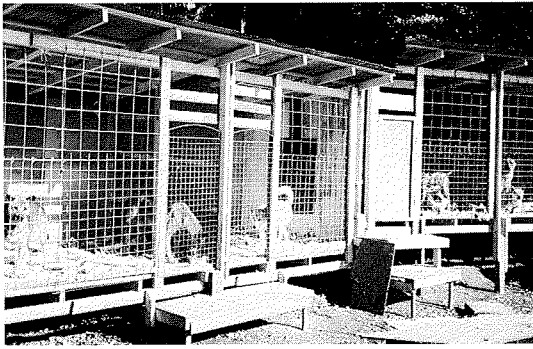
ところが、犬が獲物を感知し、突然鳴き出すと、「いざ決戦」モードとなる。そこには当然、危険が隣り合っている。誰かに助けを求めようにも、誰もいない。しかし、手塩にかけて育て、実戦で鍛え上げた信頼できる愛犬達がいる。それで十分だ。自信を持って、全力で目の前の獲物を倒す。これが単独猟で

ある。あくまで、わが身と愛犬の安全を第一に、冷静に、そして慎重に狩りを進める。その結果が「喜び」となっても、「残念」となっても、それは自分と愛犬の実力が生み出したもので、どちらの結果になろうと、「狩りの楽しさ」を十分味わうことができるはずである。

昔から「一犬、二足、三鉄砲」と語り継がれているが、単独猟においての基本も、まさにこのとおりである。しかし、その実行において、少しばかり異なっているように思う。

まず、「一犬」であるが、まさにそのとおりである。強力な止め犬の軍団こそが単独猟の支えとなる。次に、「二足」は、強いほうがよいかな…と思う程度である。最後の、「三鉄砲」は、一発で狙った所に狂いなく当てる技術は必要であるが、あまり重要とは考えていない。

「二足」は、犬の芸が未熟で、イノシシに飛ばれてばかりいる。イノシシを探す。犬が鳴き出したら、少しでも早く現場に駆けつける…。確かに、これらは「足」かも知れない。しかし、がちりイノシシを止めて刺せる芸を



日当たりの良い犬舎は、良い猪犬作りの第一条件である。毎日新聞紙を敷き、清潔にしている

持つ犬達なら、健脚ほどの「足」は必要ではない。

「足」より「鉄砲」より大切なことは、犬達が止めている獲物の「確認」と、それに対する「判断力」である。止めているのは何か？ それがいノシシなら戦況はどうなのか？ 周りに人など居ないか？ それらの確認である。もし相手が犬猪で、犬が危険と思われたら、一刻も早くいノシシを倒さなければならぬ。犬に対する「銃音」を気にしている場合ではない。

また、明らかに勝ち戦で、全犬がいノシシに付いて咬みを入れ、団子状態で押し合いになっていくときは、猟刀を握って一目散に突進する。この場合の注意点は、いノシシのタテガミはどうなっているか、尻を落として座り込むような格好になっているか、決して見落としてはならない。思わぬ反撃に遭うことがあるので、要注意である。

いノシシが「キイーキイー」と、悲鳴のような鳴き声を発し、タテガミは寝ていて、尻を落とした状態でなければ、迂闊に刺しに行かないほうが賢明だ。いノシシが最後の力を振り絞った

ときの状態は恐ろしいほどで、一瞬にして全犬を振り払い、後に嫌と言うほど苦勞させられる。さらに、いノシシに近寄るときは、必ず逃げ道を考えながら、上方からにする。間違っても、沢下からとか、いノシシの前下からはダメである。

さて、「三鉄砲」であるが、完全に止めたいノシシを撃ち獲るのは、三〜一〇mの距離で、どんなに離れても二〇mまでであろう。私は、銃が少し大きめの「〇六」を使っており、スコープも大きいものを付けているので、三〇m以上離れて撃つことにしているが、犬の音に対する害を除けば、普通は三〜五mの所から大きないノシシを撃つのであるから、当たらないほうがいいかと思う。

大物猟をする誰もが忘れてならないことは、正確な射撃技術は当然であるが、「メンタル」部分の強さを持つことである。いざ大猪を前にすると、誰でもけたたましい犬群の鳴き声や、いノシシとの激しい攻防に平常心を失いがちである。

犬が一定の距離を置いて、大猪を囲むようにしているときは、

一刻も早く撃つことであるが、その前に、いノシシの後ろに大石や岩はないか、いノシシの反対側に愛犬が付いていないか、などをよくよく見極めなければならぬ。

じっと見ていると、大猪は必ず犬をまくって出て来る。パツと犬は退く。大猪は勝ち誇ったかのように、クルツと向きを変えて元の場所に戻ろうとする。この一瞬が、まさに射撃チャンスである。また、同じように向きを変えて元の場所に戻り、こちらを向いたときの一瞬も射撃チャンスで、これを逃さないようにしなければならない。

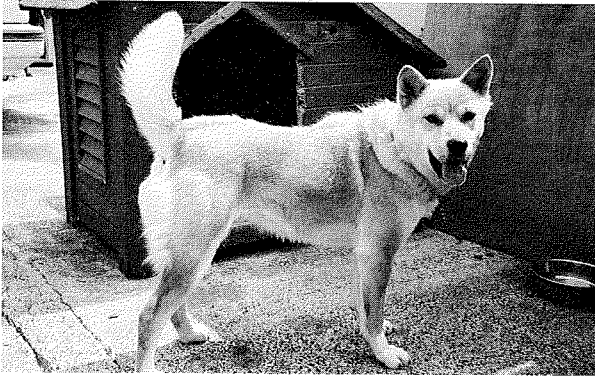
ただ、いノシシに犬が付いていて、一回目のチャンスを逃しても、いノシシはこの行動を繰り返すので、焦らず落ち着いて対処することである。

さらに、もう一つ大切なことは、犬が逃げるいノシシを必死に追い、団子状態のときは、絶対に撃つてはいけないということである。撃てば、必ず犬に当たるので、ここはぐつとこらえる。例え逃がしても、愛犬達は下の沢で止めるので、何の心配もない。

簡単なことだが、安全な猟をするためには、止めているモノ、追っているモノ、そして周りの状況に全神経を注ぎ、「確認」と「判断力」をもって猟を行うことである。恐がらず、あわてず、落ち着いて、ゆっくり猟を楽しむことである。

●新たな出会いに喜びを

十六年度猟期は、本誌への記事掲載のお蔭で、近頃の猟友から「ぜひ、愛犬の猟芸を見に来



一軍入りの「愛」号

てほしい」との連絡をいただき、うれしいかぎりであった。そのほとんどが私の作出犬を使っている方で、「愛犬が良くなったよ」と聞かたび嬉しく、このうえない喜びを感じた。

今後は、都合のつくかぎり出かけ、犬の成長を見せていただきたいと思っている。まだまだ楽しい「ジジの単独猪猟」である。愛犬と大猪の攻防は、私の心の「ときめき」であり、元気の源でもある。また、単独猟においての先導犬は主人(私)であり、犬群のボスもまた主人である。愛犬達は、主人の態度をすべて見ているのであるから、元気を出し、「大猪、何するものぞ」の気迫で頑張りたいと思っている。私同様に、単独猟に励む皆様の活躍を祈っています。

*私の「単独猟」における考え、狩猟法をご理解いただける方でしたら、どなたでも気軽に「ご一報ください。時間の許すかぎり共猟します。また、他の考えや狩猟法をお持ちの方、ご意見をお聞かせください。(連絡先)

TEL 044-944-3220

猟犬訓練に必携の決定版!

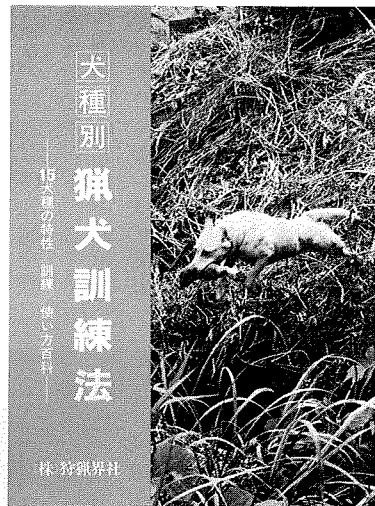
犬種別 猟犬訓練法

狩猟界編集部編 B5判 定価5,775円(税込)
〒450円

15犬種の特性/訓練/使い方百科として
全国の狩猟家に好評!

選ばれた15犬種は何か? わが国の猟野性とゲーム性を考えての犬種選択です。猟犬種は、その地域のゲームと猟法と選ぶべきで、そのための15犬種についての特性と猟芸の特徴が記述されています。

猟犬の訓練上手は狩猟家としての誇りです。お早めにお申込みください!



※定価は消費税込みの価格です。お申込みいただくときは送料をご加算ください。

発行 (株) 狩猟界社 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町1-21
郵便振替 00130-0-70665 電 03(3292)1211(代)